



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	青年期における友人の慰めが受け手の評価・感情に与える影響とそのメカニズム(全文の要約)
Author(s)	小川,翔大
Citation	
Issue Date	2015-03-17
URL	http://hdl.handle.net/2309/139030
Publisher	
Rights	

要約

青年は友人からの慰めといった情緒的サポートを強く期待し (Argyle & Henderson, 1984), 友人から慰めを受けることで安心感を得て, 不安やストレスに上手く対処していく。しかし, 青年期では慰めのネガティブな側面が意識されやすく, 慰めによって友人を傷つける事を懸念して慰めが生じにくくなっている。また, 青年期の友人関係の質は中学生から大学生までに発達的な変化があり (榎本, 2000; 落合・佐藤, 1996), 親しい友人に対する欲求や期待は学校段階ごとで異なっている。

そこで本論では 6 つの研究を通して, 慰めが友人に与える影響の仮説モデルの生成および検証と, 青年期の友人関係の質の発達的な変化による慰められた時の受け手の感情の違いを検討した。そして, 検証結果を基に最終的なモデルを提示した (Figure 1)。

研究 1 では, 慰められた体験について大学生に半構造化面接を行い, 要因→評価→感情のプロセスを想定した仮説モデルを生成した。要因は, 「相手との親密さ」, 「相手の立場」, 「出来事の質」, 「慰め方」, 「出来事の原因帰属」といった 5 つの外的要因と, 内的要因 (個人差) に分けられた。評価は「相手の慰めの意図」, 「問題解決への有効性」, 「自分の能力への脅威」の 3 つ, 感情は「感謝」, 「自責」, 「反発」の 3 つに分けられた。

研究 2・3 では, 大学生を対象に, 「相手との親密さ」は感謝と反発, 「出来事の質」は感謝と自責, 「出来事の原因帰属」は自責との関連が検証された。特に, 「相手との親密さ」は慰めの受け手に与える影響をポジティブ, または, ネガティブに分ける重要な要因であると考察された。

研究 4 では親しい友人から慰められた時の評価と感情の関連を, 中学生, 高校生, 大学生を対象に検討した。その結果, 「相手の慰めの意図」は感謝および反発, 「問題解決への有効性」は感謝との関連が検証された。

また, 親しい友人が励ましや共感の言葉かけをする場合, 受け手の感謝が高くなり, 特に中学生と高校生でその傾向が強かった。これに対して, 親しい友人が何もせずその場を離れた場合, 受け手の反発が高くなり, 特に高校生でその傾向が強かった。

研究 5 では, 「相手との親密さ」を深く掘り下げ, 友人への欲求・期待 (相互尊重欲求, 心理的サポート希求, 不安, 閉鎖的関係の希求, ふれあい回避欲求, ライバル心) が, 評価を媒介して感情に与える影響を, 中学生, 高校生, 大学生を対象に検討した。その結果, 「心理的サポ

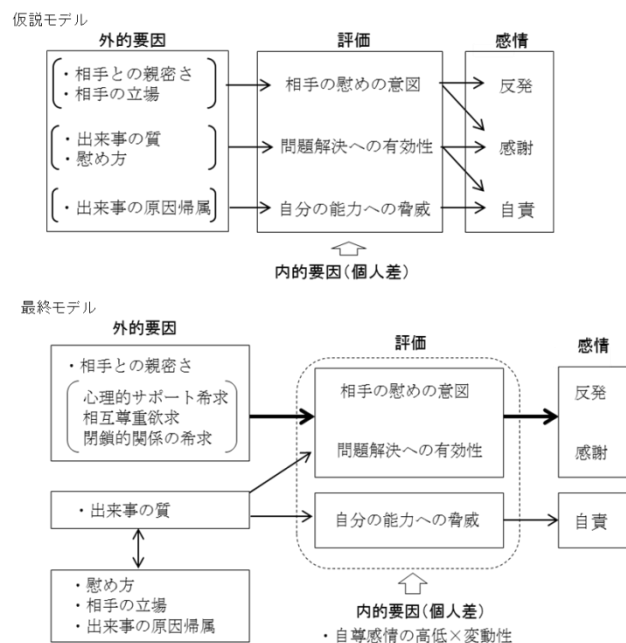


Figure 1 仮説モデルと最終モデル

ート希求」「相互尊重欲求」「閉鎖的関係の希求」が「相手の慰めの意図」や「問題解決への有効性」の評価、または、感謝や反発と関連している事が検証された。また、中学生から大学生にかけて「心理的サポート希求」と「閉鎖的関係の希求」は低くなり、「相互尊重欲求」が高くなるといった友人関係の質の発達の変化が、慰められた時の感情の違いに影響していることが検証された。さらに、「相手の立場」は感謝と反発に関連し、「自分の能力への脅威」の評価は自責と関連していることが明らかとなった。

研究6では、自尊心の高低・変動性の個人内要因による感情の違いを、大学生を対象に検証した。自尊心が高い人は変動性に関係なく、非言語的な慰め（ただそばに寄り添う）が言葉的な慰め（励ましや共感の言葉かけ）よりもポジティブに働いていた。自尊心が低い人の内、自尊心が安定した人は言語的な慰めが非言語的な慰めよりもポジティブに働き、自尊心が不安定な人は非言語的な慰めが言語的な慰めよりもポジティブに働いていた。

本論で提示した最終的なモデルの意義は、1) 「相手との親密さ」を友人に対する欲求・期待の側面から詳細に分類することで、友人関係の質の違いによる、慰められた時の感情の違いを説明できること、2) 評価的側面と感情的側面の2つの測定指標をモデルに組み込むことで、慰めの受け手に生じるポジティブ・ネガティブ感情が同時に生じるメカニズムが解明されたことである。

さらに、青年期の友人同士のより良い慰めについて、1) 自分が落ち込んだ時には親しい友人に対して慰めを期待しているため、何もせずそっとしておくよりは慰めをした方が受け手にとってポジティブな影響を与えること、2) 親しい友人からの慰めであっても、学業の失敗といった能力比較をしやすい出来事では感謝だけでなく自責の感情も生じやすいため、不用意な言葉かけをせず、そばに寄り添い、一緒に時間を過ごすといった非言語的な慰めなどが有効的であることが考察された。